

女子大学生の養育者効力感に及ぼす、ペアレントトレーニングの効果について

著者	木村 秀
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	28
ページ	47-55
発行年	2022-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003468/



女子大学生の養育者効力感に及ぼす、 ペアレントトレーニングの効果について

木村 秀

1. 問題と目的

近年、虐待する親への治療や子育て支援策として、ペアレントトレーニングが数多く実施されている。日本では精研式ペアレントトレーニングや、オーストラリアを中心に活用されている前向き子育てプログラム・トリプルPなどの取り組みが実践されている。また、カナダのプログラムであるノーバディーズパーフェクト（完璧な親なんていない）、愛着に焦点を当てたサークルオブセキュリティ、子どもに虐待をしてしまう親を対象としたMY TREEペアレンツ・プログラムなどの様々な子育て支援プログラムが実施されている。これらの多くは、集団で実施されるものであり、子育てに関する知識を学ぶだけでなく、参加者同士の相互作用も影響していると考えられる。

本研究で取り上げるコモンセンスペアレンティング（Common Sense Parenting, 以下CSP）は、アメリカの児童養護施設であるBOYSTOWNが開発したプログラムで、親の養育スキルの向上が図られる内容となっている。アメリカでは、虐待してしまった親への治療プログラムとしても活用され、日本でも児童養護施設や児童相談所を始めとして、子育て支援活動の様々な分野で活用され、前述したプログラムと同様に集団で実施されるものである。^{1) 2)}

CSPは、BOYSTOWNにおける児童養護施設の実践から始まり、幼児を持つ親を対象としたプログラムや、学齢期の子を対象としたプログラム、発達障害などの課題を抱える子どもを地域で対応していくプログラムなど、対象に合わせたプログラムが構築されている。^{3) 4) 5)}

CSP幼児版は、実用的な育児プログラムで、親に効果的なしつけの方法をわかりやすく示すと同時に子どもたちに積極的な態度で向き合えるように手助けする内容となっている。このプログラムの最初の育児クラスは、1989年1月にネブラスカ州オマハ近郊にあるオフアット空軍基地で行われた。以後このプログラムは急速に普及し、現在では、2500人以上のトレーナーによってコモンセンス育児クラスが開催され、トレーナーは、米国の50州中のうち44州、世界中にある68の空軍基地と、14の国々で活動している。⁶⁾このプログラムに参加した親からは、子どもの問題行動が非常に減少し、そして自身と家族の満足度が増したと報告されている。⁷⁾日本におけるCSPの実践では、CSP幼児版を学んだ学生の育児自己効力感が有意に高まる結果となったことが報告されている。⁸⁾

幼児版で使われる訓練モデルは、「経験を通して学ぶ」ということに焦点が当てられている。参加者の大人が子ども達に家庭内でスキルを使う前に、安心出来る講座の中で学び、練習する機会を持つ。育児クラスの内容は練習することに焦点を当て、実演とDVD映像のモデリングは、練習を更に効果的にする内容となっている。

先行研究では、虐待する親や、子育てに不安を抱える親や里親、児童養護施設の職員を対象として効果測定が実施されてきたが、本研究では基礎的な内容となる幼児版を活用し、学生を対象とする。学生は育児の経験がなくとも、ペアレントトレーニングの技術を学ぶことで、養育者としての効力感についてどのような変化が期待できると感じるものなのか明らかにすると同時に、ペアレントトレーニングを学んでいない学生でもペアレントトレーニングにどのような変化の期待を持つかを明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 方法

(1) コモンセンスペアレンティング幼児版

CSP（幼児版）のプログラム内容は図1に示すように、計6セッションで構成され、すべて実施した。

セッション1では、子どもの発達について学ぶことや、子どもに対する適切な期待値の考え方、子どもの愛着関係を構築するための育みの行動について学ぶ内容となっている。

セッション2では、子どもに話をわかりやすく伝える方法として、行動に焦点を当てることや、行動を変容する方法として結果を使うことについて学ぶ。

セッション3では、「効果的なほめ方」について学ぶ。既にできていることを褒めることや、以前、失敗したことができるようになったことや、新しいことにチャレンジした時に褒めるのがポイントで、子どもの側に立った理由を用いて説明することで、子どもの行動変容を促していく内容となっている。

セッション4では、「予防的教育方法」という前もって、子どもにどのようにふるまったらよいかを教える内容となっている。また、子どもたちに社会的スキルを教え、新しい状況の前や子どもが以前、難しかった状況の前にどう振舞うとよいかを教える方法を学ぶ。

セッション5では、「問題行動をただす教育方法」について学ぶ。子どもがすべきことをしない時や、してはいけないことをする時に、大人としてどのように対応するかを学ぶ内容となっている。

セッション6では、「自分自身をコントロールする教育法」について学ぶ。子どもの感情が高まり、問題行動を正す教育法が出来ない時に子どもを落ち着かせて、学ぶ機会とするために、大人が落ち着きを保つプランを立てることや、子どもを落ち着かせる方法について学ぶ。

セッションは、①指導（プレゼンテーション）、②モデリング（DVD視聴）、③スキル練習（大人が練習）、④フィードバック、⑤まとめという流れで構成されている。学生は、毎セッションご



図1 プログラムの概要

とに、学んだ内容についての宿題にも取り組んでもらった。

(2) 研究対象者

ペアレントトレーニングを受講した学生を実験群とし、実験群の学生における質問紙調査は、コモンセンスペアレンティングの講座の実施後に実施した。ペアレントトレーニングを受講していない学生は統制群とし、統制群の学生においても、実験群と同時期に調査を行った。

対象は、女子大学生、実験群87名、統制群52名、計139名から回答が得られた。

(3) 調査内容

①育児に関する自信や養育について

実験群、統制群の両者に田坂（2003）が作成した育児自己効力感尺度と、⁹⁾武田（2014）が作成した愛着－養育バランス尺度を活用して、¹⁰⁾ペアレントトレーニングを受講した人に変化が期待されるかという視点で回答を求めた。育児自己効力感尺度は、親としてどのくらい有能かつ効果的にふるまうことができるかという程度に関する親の期待を測る尺度である。次に、「愛着－養育バランス」尺度は、親の養育者としての発達を、「愛着システムから養育システムへのシフト」と捉え、その発達状況を測定する尺度である。

②ペアレントトレーニングに関する自由記述

実験群、統制群の両者に、質問1「ペアレントトレーニングを学ぶことで、親（養育者）に、どんな変化が起こると期待できそうですか?」、質問2「親（養育者）になる前に、ペアレントトレーニングを学ぶことについての、あなたの考えを教えてください。」と質問し、自由記述で回答を求めた。

(4) データ分析方法

育児自己効力感尺度、愛着－養育バランス尺度の各尺度得点において、実験群、統制群の両者の得点間でt検定を実施した。また、実験群、統制群の両者に求めたプログラムの内容についての自由記述による回答について、テキストマイニングを用いて分析を行った。

(5) 倫理的配慮

対象者には、文書で本研究への参加は自由意思に基づくものであるとして、参加の同意を得た。また、研究協力への拒否者に対し、不利益な取り扱いがないことを、説明文書を通じて周知した。アンケートの実施にあたっては、個々の研究対象者を特定できないよう無記名で実施し、個人情報保護に配慮した。

本研究は、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て、実施されたものである（承認番号 KWU-IRBA#2004）。

3. 結果

実験群、統制群の間で、養育者自己効力感尺度及び「愛着－養育バランス」尺度において、下位尺度も含めて有意差はみられなかった。ペアレントトレーニングの受講者の方が自己効力感や愛着システムに関して得点が高くなるのが推測されたが、受講の有無に関わらずペアレントトレーニングに対する期待を同程度持っていたと考えられる。統制群の学生は、ペアレントトレーニングを受講していなかったが、ペアレントトレーニングの重要性について学んだだけで、養育スキルの向上や良好な愛着関係の構築が期待されたために有意差が見られなかったと推測される。その一方で、受講有無の違いによって自由記述におけるペアレントトレーニングの有効性に関する質的な違いがあると考えられ、この点を明らかにするためにテキストマイニングを用いて分析し、期待される成果の違いについて明らかにする。

実験群における質問1「ペアレントトレーニングを学ぶことで、親（養育者）に、どんな変化が起こると期待できそうですか？」の自由記述の回答をテキストマイニングした結果では、図2の共起ネットワーク図が得られた。「ペアレントトレーニング」から、「学ぶ」、「養育」、「知る」、「今」、「自信」、「褒める」、「分かる」「自分」という言葉との同一カテゴリにおけるつながりが見られ、「適切」、「期待」、「持つ」など、適切な期待値について等CSPで学んでいる内容が反映される結果が見られた。

図3の統制群における質問1の回答についての共起ネットワークでは、ペアレントトレーニング

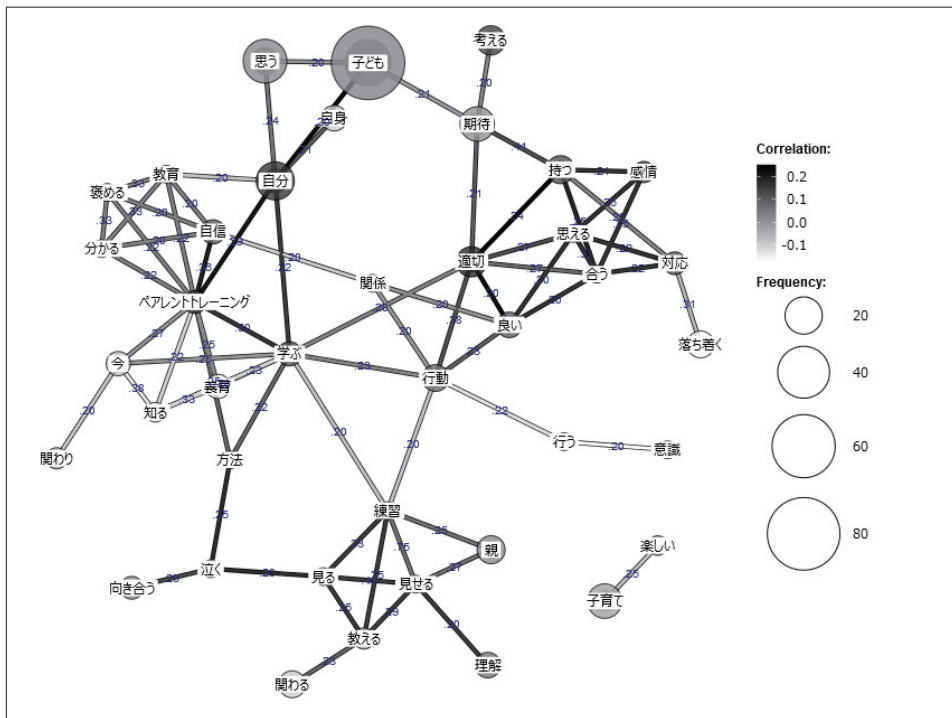


図2 実験群 質問1 共起ネットワークの図

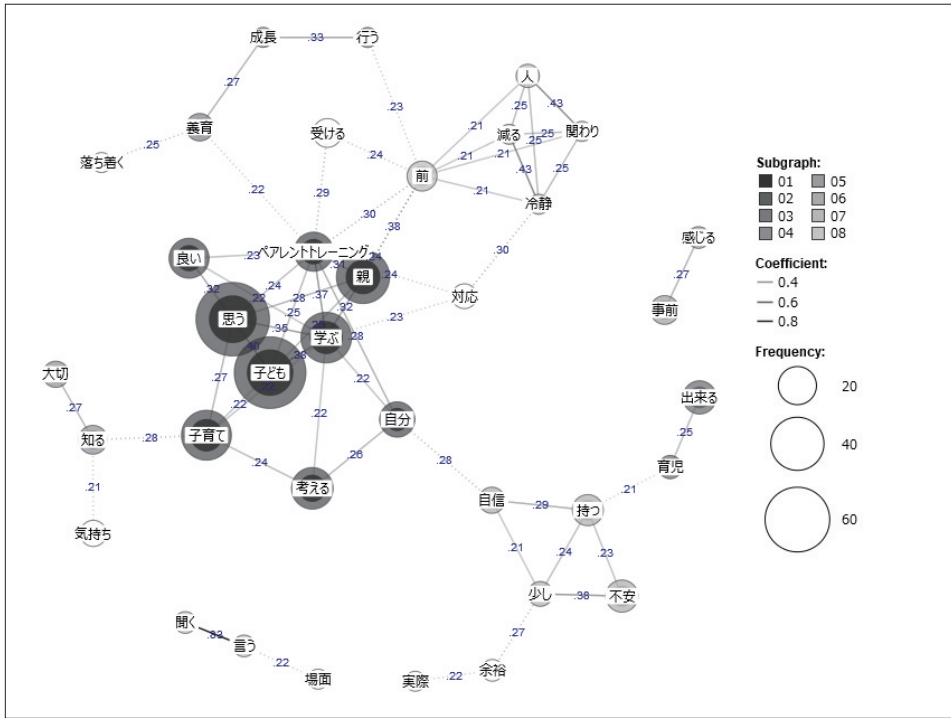


図4 実験群 質問2 共起ネットワークの図

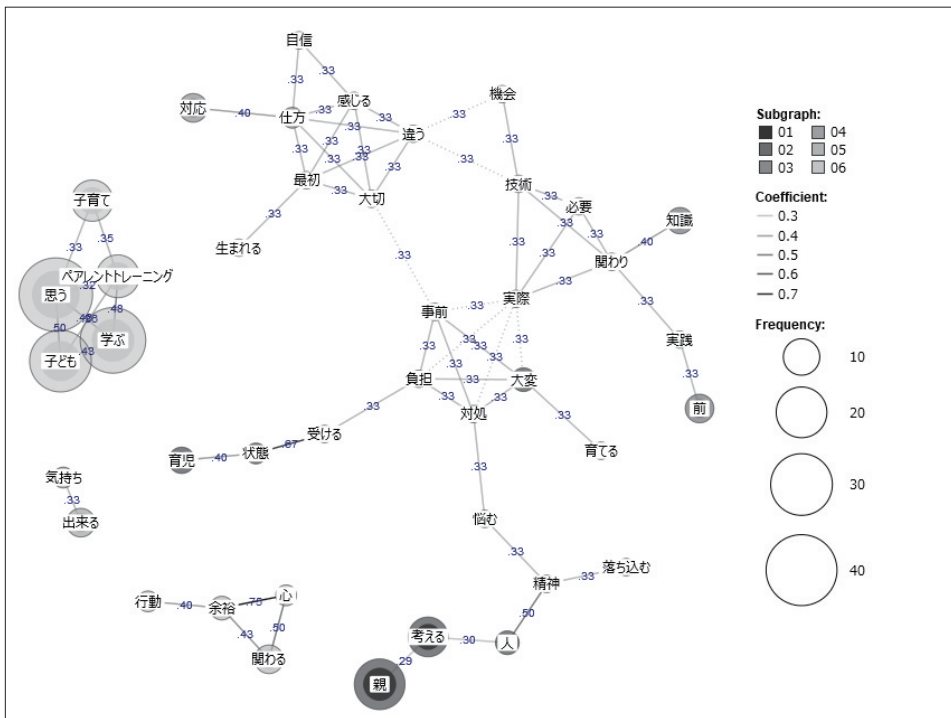


図5 統制群 質問2 共起ネットワークの図

ワードである自分自身をコントロールする教育法の中身が反映されていると考えられる。

図5の統制群における質問2の共起ネットワークの図では、「ペアレントトレーニング」と、「思う」、「子ども」、「学ぶ」、「子育て」と繋がりがあり出現頻度が多い結果となった。ただ、これらの言葉は他のカテゴリーから独立していて、質問1の結果と同様にペアレントトレーニングの具体的な内容との繋がりが無い結果であった。

4. 考察

ペアレントトレーニングに期待される効果について、ペアレントトレーニングを受講した人とそうでない一般的な知識を持っている人との間でペアレントトレーニングの効果としての育児自己効力感や愛着との関連について量的な違いは、見られなかった。女子大学生におけるペアレントトレーニングの受講の有無が期待される効果の差につながらなかったのは、統制群におけるペアレントトレーニングに関する概論的な知識でさえ、その重要性について十分に感じられていたことが要因であると考えられる。

ペアレントトレーニングを受講した人がその効果を強く感じられることは当然であるが、未受講者で概論的な知識においても同様に効果を期待できるという結果は、ペアレントトレーニングの受講前に内容に関する簡易な説明があるだけでも期待度に影響があり、受講へのハードルを大きく下げるものであると推測される。子育て支援活動等におけるペアレントトレーニングを推進する際に、すぐに受講へ繋げなくとも、ペアレントトレーニングの内容を説明する機会を持つことで、ペアレントトレーニングの普及や推進に寄与すると考えられる。しかし、ペアレントトレーニングを未受講である統制群の学生は、子どもに関わる対人援助職を目指す集団でもあり、もともと関心が高かったとも考えられる。子育てに関する支援が必要でありながら、自身の育児能力に関心が低いか、育児能力の低さを否認しているような人には、異なるアプローチが必要であると考えられ、アメリカの制度のように、ペアレントトレーニングの受講を義務付けるなどの仕組みを活用することも求められる。

量的な分析では、ペアレントトレーニングの受講の有無による期待される効果への違いは見られなかったが、テキストマイニングによる質的な分析においては、ペアレントトレーニング受講者である実験群の記述は、未受講の統制群と比べて、ペアレントトレーニングの内容を踏まえたものが散見された。実験群には、「自信」や「ほめる」、「落ち着く」、「対応」など、養育スキルに関する効果が期待される記述を始めとして、子育ての知識や技術の重要性、子どもへ対応する練習の重要性について言及されていた。統制群の記述はペアレントトレーニングに対する一般的な期待が反映されたものであった。統制群は、質問である親（養育者）になる前に、ペアレントトレーニングを学ぶことについて、なんとなく学んだほうが良いという考えであると受け取れる。受講の有無によってこのような違いはあったが、ペアレントトレーニングへの期待と重要性はどちらも変わるものではない。

本研究の結果は、学生という子を持つ実際の親でなくとも、ペアレントトレーニングの効果への

期待を持てるようになることは、適切な養育を学び実践したいという原動力となり、児童虐待の予防に寄与することにもつながると示唆される。そして、広くペアレントトレーニングについて周知することや、中等、高等教育課程の中に組み込むことも重要な取り組みであると考えられる。

引用文献

- 1) Bridget A. Barnes, Steven M. York M.H.D.: Common Sense Parenting of Toddlers and Preschoolers BOYSTOWN PRESS 2001 (訳者：久山康彦リチャード、三木身保子 監修：堀健一、東野紀江 ポーイズタウン・コモンセンスペアレンティング 幼児篇テキスト)
- 2) Ray Burke, Ph.D., Ron Herron, Bridget A. Barnes, M.S.: Common Sense Parenting Third Edition BOYSTOWN PRESS 2001 (訳者：久山康彦リチャード、三木身保子、利根川泰奈 監修：堀健一、東野紀江 ポーイズタウン・コモンセンスペアレンティング 学齢期篇テキスト)
- 3) 上記1)
- 4) 上記2)
- 5) Jennifer Resetar Volz, Ph.D., Tara Snyder, Psy.D., Michael Sterba, M.H.D.: Teaching Social Skills to Youth with Mental Health Disorders BOYSTOWN 2009 (訳者：久山康彦リチャード、三木身保子、利根川泰奈 監修：堀健一、木村秀、北川聡子 社会スキルは子どもの未来を変える！)
- 6) Ronald W. Thompson, Ph.D., Penney R. Ruma, M.S., Albert L. Brewster, ASCW, Ph.D., Leasley K. Besetsney, M.S., and Raymond V. Burke, Ph.D. Evaluation of an Air Force Child Physical Abuse Prevention Project Using the Reliable Change Index, Journal of Child and Family Studies, Vol. 6, No. 4, 421-434, 1997
- 7) 上記6)
- 8) 木村秀：大学生におけるコモンセンスペアレンティング（幼児版）実施前後の養育者効力感の変化について 第21回子どもの虐待防止学会発表論文集, 2015
- 9) 田坂一子：育児自己効力感（parenting self-efficacy）尺度の作成 甲南女子大学大学院論集. 人間科学研究編 創刊号, 1-10, 2003
- 10) 武田江里子：「愛着－養育バランス」尺度短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 第73巻 第6号, 783-789, 2014

Effects of parent training on parenting self-efficacy among female college students

Masaru Kimura

This study examined the differences in expectations for parent training among female college students depending on whether or not they had taken it.

As a result of asking the students to answer whether they could obtain the benefit from learning parent training for each question item such as parenting self-efficacy, no significant differences were found.

On the other hand, in the diagram of co-occurrence network in text mining, qualitative differences were observed. The unlearned students' expectations were connected with vague words, while the learned students' expectations were connected with keywords related to specific knowledge and skills related to parent training.